



## INDEX

### — TOPICS —

1. 拡大するカザフスタンとの医療交流  
 国際連携研究戦略コーディネーター/助教 高橋 純平
2. 長大生、魚を求めて海外のフィールドへ  
 国際連携研究戦略コーディネーター/助教 藤野 忠敬
3. アフリカ仏語圏の国々からの保健医療行政官12名を研修員として受入  
 国際連携研究戦略コーディネーター/准教授 平岡 久和
4. アジア、アフリカ、中米からの感染症対策の従事者12名を長崎で研修  
 国際連携研究戦略コーディネーター/准教授 平岡 久和

### 1. 拡大するカザフスタンとの医療交流

国際連携研究戦略コーディネーター/助教 高橋 純平

前稿（平成27年3月号）で紹介したカザフスタンと長崎大学との医療交流は、今年度に入ってもなお拡大の一途をたどっています。最近の動向の主なものをリストアップしてみます：

①WHOへ出向中の野崎CICORN副本部長のアルマティ市への派遣。（5月）「ユニバーサル・ヘルスカバレッジ」をテーマに講演。

②蒔本長崎県医師会長、山下理事・CICORN本部長を含む代表団のアルマティ市・セメイ市への派遣。

\*提携校であるカザフスタン医科大学、セメイ医科大学、およびセメイがんセンター、アルマティ第7市立病院などの訪問\*長崎県医師会と共和国医療会議所東カザフスタン支部との協力に関する覚書締結式

③3度目となる長崎におけるカザフスタン院長・副院長医療研修（9月）

④JASSO（日本学生支援機構）の協定留学支援制度を利用した長崎大学への留学生受入（セメイ2名、アルマティ3名）

⑤災害・被ばく医療科学共同専攻修士大学院への入学希望者（セメイ2名）



①まずはGW明け早々の5月中旬、ジュネーブのWHO本部へ出向中の野崎教授がカザフスタンへ招聘され、「ユニバーサル・ヘルスカバレッジ」について2日間のセミナーが行われました。医療費無料システムをソ連時代から受け継ぐ中で遅れていた医療の近代化に近年積極的に取り組む中で、2年後に迫った医療保険制度の導入への対応はすべての医療機関にとっての喫緊の課題です。野崎教授は、日本の国民皆保険制度の紹介のみならず、イギリス、タイ、スイスなど様々な国の医療保険制度の特徴を紹介し、カザフスタンの選ぶべき制度について広く考察する必要性を説きました。

②カザフスタンでは例年肌寒くなっている8月末、蒔本長崎県医師会長を団長とする代表団がカザフスタンを訪問しました。CICORN本部長である山下理事、高原県医師会副会長、原研中島教授、原研林田教授、原研ムサジャーノワ・ポストドク研究員、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）西職員、CICORN高橋という構成です。肌寒いどころか好天に恵まれ続けた一週間となりました。

アルマティでは提携校であるカザフスタン国立医科大学を訪問し、学長と今後の協力関係強化について確認しあい、大学付属の病院も訪問しました。山下理事とは20年来の協力関係にあるアビーロフ内分泌センター所長宅にも招かれ昼食をご馳走になりました。



セメイ医科大入学式の様子。大学正面入口の前で行われる入学式終了後に新入生たちが大学へ入っていくという流れ

また、病床 1000 以上の救急を専門とする第七市立病院も訪問し、その近代的な設備と病

院経営へのア

プローチにカザフスタンの医療の着実な進歩を実感しました。セミパラチンスク核実験場に近いセメイ市（旧名セミパラチンスク）では、提携校セメイ国立医科大学での学術会議「放射線・人間・環境」に参加し、山下理事、中島教授が発表。翌日の入学式では医科大学学長に次いで山下理事も祝辞を述べました。さらには、長崎大学での短期留学プログラム（NISP）で1年間の留学から帰ったばかりのマディナさん（5年生）も学生代表で新入学生に挨拶していました。

セメイ市で訪れたがんセンターでは、昨年建物が改築され PET-CT が 2 台、自前のサイクロトロン、スペクトル CT も 2 台、など高度な医療機械が導入されていました。20 年前から同センターを知る山下理事はその劇的に改善された設備環境に感激しきりでした。

この訪問の最大の目的である長崎県医師会と共和国医療会議所東カザフスタン支部との協力に関する覚書の締結は、



長崎新聞平成 27 年 9 月 2 日 長崎新聞社提供

セメイ市役所の一室で、市長、市の保健局長ら主要な医療関係者、地元メディアの見守る中行われました。

セミパラチンスク核実験場が閉鎖された日で国連が「核実験に反対する国際デー」（International Day against Nuclear Tests）と制定した 8 月 29 日には、核実験場閉鎖記念のモニュ

メントでの献花式が行われ、蒔本医師会



セメイ市郊外に建立された核実験場閉鎖モニュメント 毎年献花式、鎮魂の式典が行われる

長と山下理事は長崎代表として献花しました。

③ 3 年目のカザフスタン院長・副院長医療研修の受け入れは、9 月の最終週に行われました。異なる都市から 6 名の院長・副院長・専門科長が来崎しました。長崎大学病院の諸先生の他、長崎県医師会、国立病院機構長崎病院、南長崎クリニック、長崎健康事業団において、大変丁寧な講義、視察受け入れをしていただきました。今年は国民皆保険制度についての理解を深めていただくため、保険制度にシ

④、⑤ 8 月のカザフスタン訪問において、山下本部長は、8 名の長崎大学留学希望者と面談しました。4 名（アルマティ 2 名、セメイ 2 名）



は、JASSO（日本学生支援機構）の協定留学支援制度を利用した博士課程留学予定者。2-3 カ月間の留学予定です。2 名（アルマティ）は、カザフスタン政府もしくは大学の助成を受けての、やはり博士課程留学希望者。1 名は今年の冬、もう 1 名は来年度の留学が予定されます。JASSO の留学枠では、もう一名、移植消化器外科への留学もすでに決定しています。

さらにはセメイでは、来年 4 月に開設される福島医大との共同大学院・災害被ばく医療科学共同専攻への入学希望者 2 名とも面談しました。現在入試へ向けての手続きが進行中です。

このように拡大を続ける一方のカザフスタンとの医療交流。特にカザフスタン側の積極的な姿勢が目立ちます。ここに掲げた交流とは別に、大村の長崎医療センターも活発にカザフスタンの医師を受け入れていると伺っています。県医師会との協力の覚書が交わされた医療会議所東カザフスタン支部からは、すでに長崎での医師研修の申し込みがあり、今後も益々活発な交流が予想されています。

私自身は長崎大学ベラルーシ研究拠点を中心にロシア語圏諸国との共同研究などの調整を担当していますが、今年に入りカザフスタンへすでに 2 度足を運んでおり、今後もカザフスタンでの活動の比重が大きくなることが想定されます。コミュニケーションの言葉はロシア語ですが、やはりアジア人気質のようなものは感じられます。カザフの方々も同じアジアの国で、例えば年長者を敬う文化など同質の文化圏という意味で日本という国へ独特の親近感を感じているようです。

ベトナムのカントー市。メコン川の広大なデルタ地帯には栄養分に富んだ水に、日本でお目にかかれない、ナマズやハゼ類、ナイフフィッシュ、古代魚などが数多く生息しています。こうした魚は種類によっては大規模な養殖がなされ、現地のみならず世界に広く消費されています。そんな魚の一つで日本のスーパーでも販売されているパンガシウスナマズ。メコンデルタの養殖を支えるこの魚を追いかけて、一人の長大生が2015年9月から現地のカントー大学で研究をしています。野間昌平君（M1）は養殖の最重要魚種であるパンガシウスナマズの呼吸の仕組みを探るために、3か月間現地で生活をしながら、ナマズのサンプルと格闘中。野間君がお世話になっているベトナムのカントー大学は長崎大学と2012年に学術交流協定を結んでおり、JICAの円借款「カントー大学強化事業」（2015年7月貸付契約調印）と連携して、様々な研究を長崎大を含む日本の大学と展開するポテンシャルを持つ大学です。



ベトナムカントー市の所在

ベトナムの生活の魅力は、その生活費の安さと美食にあります。野間君の住むアパートの家賃は月15000円ほど。食事は有名なフォーを始めとする様々なタイプの麺料理、豚

肉料理、淡水魚料理で、日本で食べない食材もいろいろあります（変わったところでヘビやハト）。値段は安く、学食の食事なら1食100円から150円。研究面では日本とのインフラ・環境の違いはありますが、現地の先生方や学生の協力で新たな研究を開拓しながら第一次産業に関わるチャレンジを行うのにカントーは魅力一杯の土地です。



パンガシウスナマズのサンプル処理をする野間君



カントー大の学食 一食100～150円



カントー大本部に設けられた長崎大の交流推進室

台湾沖の東シナ海。ここでも、長崎大の学生が魚を追ってフィールドに出ました。刀祢和樹君（M1）は日本と台湾を行き来していると見られるバショウカジキの回遊生態を明らかにするため2015年6月から2ヶ月、国立台湾海洋大学及び行政院農業委員会水産試験所との共同研究で台湾漁船に乗り込み、カジキにデータロガーを装着して遊泳中の体温、環境水温、深度、速度、加速度の情報を収集しました（公益財団法人交流協会の若手研究者交流事業と笹川科学研究助成による）。一方で台湾からは国立台湾海洋大学の大学院生・林憲忠君が9月から1ヶ月、長崎に来て鹿児島から台湾へのバショウカジキの南下回遊を調べています。魚ならぬ、学生の回遊。国境なき海を回遊する魚の研究にはこうした複数国間での取り組みが必須となります。



バショウカジキを抱える刀祢君と林君



刀祢君の調査に協力してくれた台湾漁船の船長さんと刀祢君



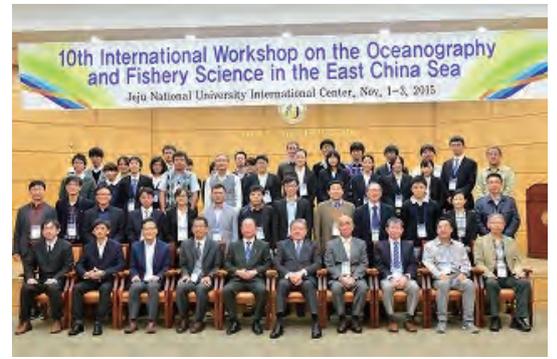
台湾の宴会

東シナ海における“International Workshop on the Oceanography and Fisheries Science in the East China Sea”は長崎大が貢献している複数国間の研究プラットフォームの一つ。1997年から始まった本ワークショップは今年で10回目を迎えました。今年には済州島で上海海洋大学、国立台湾海洋大学、国立済州大学校の学生と、琉球大学、長崎大学の学生が Student Session で交流を深め、将来の情報交換等について話合いました。必ずしも英語が得意でない国同士で気負いなく英語でのコミュニケーションを図る事は学生の次のステップへのよい経験となっています。



発表に望む長大生たち

海外のフィールドはもちろん言葉も常識も食事も違いますが、そんな中で環境の違いをうまくこなして、データを取り、研究を進めていくのはかけがいのない貴重な経験となります。学生がこうした経験が積めるフィールドを今後も活用し、発展させていくことが本当に国際的な水産人材の育成に求められることかもしれません。



10回目を迎えたワークショップを記念した集合写真

### 3. アフリカ仏語圏の国々からの保健医療行政官12名を研修員として受入

国際連携研究戦略コーディネーター/准教授 平岡 久和



長崎大学では、国際協力機構 (JICA) の研修員受入事業により、フランス

大人数にも拘わらず各訪問先で温かく受け入れていただきました。ス語を公用語とするアフリカ 10 か国から、地域における住民の健康の向上に取り組む保健医療の行政官 12 名を約 1 か月、研修実施のために受け入れました。本研修 (課題別研修「アフリカ地域 地域保健担当官のための保健行政 (B)」)

の本学による受託は平成 27 年度がはじめてです。研修員は、コートジボワール、コモロ、コンゴ民主共和国 (2 名)、セネガル (2 名)、チャド、トーゴ、ベナン、マリ、モーリタニア、モロッコから、6 月 30 日から 7 月 30 日の期間、長崎及び東京で研修を行いました。



講義を受ける研修員



日本の離島における保健医療の現状を現場で確かめる

研修員は地域保健行政の歴史、現在の施策、離島における保健医療向上の難しさとその対策などを学びました。その結果、「行政 (県・市) とサービス提供者 (保

健所、病院) 間、学校との連携」「法整備と法に沿った事業の執行」「遠隔地に対する保健サービス提供方針と実践、人材育成」「住民参加活動 (生活改善、地域保健グループ組織化) の活性化及び住民啓発活動の実施」といった日本での活動を、自国への適用が可能なこととして見つけることができました。



ワークショップで取り組んだ自国の保健課題抽出の結果を皆に発表

研修で得られたヒントをもとに、自国の保健医療課題の改善を進めるにはどうしたら良いか、研修員は、帰国後に何をすべきかの行動計画

を立案しました。研修の最後では、自国の「母子保健改善活動の活性化」「思春期・若者のニーズに応じた保健サービスの提供」「行政と医療機関との間の保健情報システムの改善」「保健医療従事者の人材管理ツールの開発」など、各人の活動計画内容を発表して祖国へ戻りました。

今後帰国した研修員は自身の業務環境において、日本で得られた知見をもとに業務改善に取り組みます。それぞれ抱えている課題は異なっており、人材も資金も不足がちではありますが、研修員の遠く離れた国での活躍を期待したいと思います。

本研修は 20 近い関係機関という非常に広範な機関と多くの関係者のご尽力により実現しました。受入先機関の皆様による技術的な研修内容のみならず、日本人の気配りやおもてなしの心、規律正しさといった点を実感した研修員も少なくありませんでした。ここに研修実施にご協力頂きました皆様に感謝いたします。



検査室での検査状況を実際に見て学ぶ

長崎大学では、国際協力機構（JICA）の研修員受入事業により、アジア、アフリカ及び中米の11か国から、感染症対策及び施策に携わる行政機関から12名を約3週間、課題別研修「感染症対策行政」研修実施のために受け入れました。

中華人民共和国、エジプト、エチオピア、ガーナ（2名）、インド、インドネシア、ケニア、パキスタン、パナマ、南スーダン、ザンビアから12名が来日し、8月19日から9月8日まで研修を受けました。前半は東京で厚生労働省や感染症行政関係機関を訪問し、日本の感染症対策の法律や実施体制を学びました。後半は長崎にて実際の感染症対策の現場視察を進め、日本の感染症対策の制度と取組を理解しました。さらに、自身の職場における感

染症対策の改善にむけて、帰国後の活動計画の立案を行いました。

帰国後の活動計画としては、幅広い地域から業務内容が異なる参加者だったた



病院での感染制御を実践する研修員

め、「日本脳炎の予防接種活動の向上」「C型肝炎ウイルスの感染者減少」「結核発見の推進」「病院での院内感染防止」「突発的感染症発生のサーベイランス対策構築」「マ



感染症検査室視察時の研修員

ラリア予防のための住民行動改善」など、様々な課題に対する取組みが紹介されました。

研修員は、本邦で立案した計画をもとに、早速所属組織内での研修成果の発表、活動実施の



活発な質疑応答がなされた

ための予算措置

への働きかけなど、帰国後の活動を開始しており、その活動成果の発現が期待されます。



帰国後の活動計画を各人が力強く発表

本研修は3年前から受入がされており、東京、長崎の多くの機関のご協力により、無事に終了することができました。研修員全員が研修コース内容を高く評価し、この研修成果を必ず自国に戻って活用していくと確固たる決心を胸に帰国いたしました。充実した研修の実施にご協力頂きましたすべての機関、皆様に厚く御礼を申し上げます。



4階セミナー室



3階学生自習室



5階中会議室



5階ラウンジ

人事

H27. 12. 1

山下 俊一 本部長/理事/副学長/教授  
 一瀬 休生 副本部長 / 教授(アフリカ海外教育研究拠点長)  
 高村 昇 副本部長 / 教授 (原爆後障害医療研究所)  
 萩原 篤志 副本部長 / 教授 (水産環境科学総合研究科長)  
 平山 謙二 副本部長 / 教授 (熱帯医学研究所)  
 門司 和彦 副本部長 / 教授 (TMGH研究科)  
 徳川 家広 客員教授  
 橋本 栄治 客員教授 / 国際連携研究戦略アドバイザー  
 猪又 忠徳 客員教授 / 国際連携研究戦略アドバイザー  
 青木 克己 アドバイザー / 名誉教授  
 玉栄 茂康 国際連携研究戦略アドバイザー  
 野崎 慎仁郎 教授  
 長谷部 太 教授 (ベトナム拠点)  
 平岡 久和 准教授 / 国際連携研究戦略コーディネーター  
 佐藤 美穂 助教 / 国際連携研究戦略コーディネーター  
 高橋 純平 助教 / 国際連携研究戦略コーディネーター  
 西本 太 助教 / 国際連携研究戦略コーディネーター  
 藤野 忠敬 助教 / 国際連携研究戦略コーディネーター  
 吉岡 浩太 助教 / 国際連携研究戦略コーディネーター

上田 祐介 事務室長 / 事務職員  
 富田 高廣 室長補佐 / 事務職員  
 米田 征徳 TMGH学務主査 / 事務職員  
 大野 愛奈 主任 (海外拠点係) / 事務職員  
 橋口 文 主任 (学務) / 事務職員  
 秋田 亜希子 事務職員  
 岩永 麻美 事務職員  
 岩本 伊代 事務職員  
 末永 萌久美 事務職員  
 三木 弘子 事務職員  
 Li Mengya 戦略職員  
 井本 敦子 戦略職員 / 海外拠点形成コーディネーター  
 (海外拠点赴任者)  
 斎藤 圭 主査 / 事務職員 (ベトナム拠点)  
 小谷 昌之 主任 / 事務職員 (ケニア拠点)  
 風間 春樹 事務職員 (ケニア拠点)  
 鬼頭 景子 事務職員 / コーディネーター (ケニア拠点)  
 森川 彰 事務職員 / コーディネーター (ケニア拠点)

発行人：国際連携研究戦略本部長

編集：平岡 久和 国際連携研究戦略コーディネーター / 准教授

〒852-8523 長崎市坂本町1丁目12-4

TEL : 095-819-7008 Fax : 095-819-7892

e-mail : cicorn@tm.nagasaki-u.ac.jp